

關西諸方言のアクセント (下)

——一・二音節語に就いて——

二の二 二音節動詞のアクセント

藤 原 與 一

アクセント調査の提示語を如何なる方法によつて分類するかは、最初に決定せられねばならぬ問題である。若しこの方法を誤れば、箇々の圖例に對して如何に精細な觀察が遂げられても、比較歸納を完全にすることは到底不可能であらう。……記述的研究の出発點は、性質の異同による分類そのものである。第一に音節數によつて分けることに難はないであらう。次に各音節語内に於いて再分類しようとすれば、内容と形式との一致點からするのが妥當であらう。品詞による分類が先づ之に該當しよう。かゝる同音節數の異品詞間に於ける對照比較は、精確な事實關係を捕捉せしめることが多い。更に理想を言へば、各品詞内に於いて語の心理的特質等を標準とする彙類が爲されるべきではあるまいか。この爲には語音の構造の單音的系列を精密に分析することも必要であらう。然しこれらは實際要求せられてゐるにも係らず、容易に試み難い。こゝでは暫く品詞による分類の程度に止めておく次第である。

調査語

【第一項 東京語の「○○」の語例……………書く―切る―飲む―辟く―寝る】
【第二項 東京語の「下中」の語例……………巻く―跳ぶ―着る―死ぬ】

第一項五例を通観するの、その分布の状況は名詞下降型の語例に近似してゐることが分る。その中、出雲地方及び九州の南北に特殊性が全然現はれなかつたのは、名詞の場合と大いに異なる點である。北西地方全部に一樣な「○○」型式が認められ、特殊地域となり勝ちであつた右の地方さへ劃一されてゐるのに、ひとり隱岐のみは遙かの南東と共通の「○○」を保有して山陰に特立してゐる。而も島後西半には常に「○○」を存し、山陰との脈絡を示すものゝ様である。隱岐のかゝる状態は、名詞の場合に最も多かつた、隱岐の型式分布と同一のものであり、而も動詞の場合に於いては、五例とも全然同一な型式分布になつてゐるのである。因みに日向西南部には、入聲音のため語形に變化を來してゐるものもあるが、アクセント型式の上からは、「○○」に屬するものと觀られる。

南東地方に於いても亦「○○」分布の劃一性が強い。名詞に見えた長音化の傾向も、「カク」を除いては全然見られないから、僅かに存する「○○」型式によつて、「○○」全分布の上に異點が印せられるのに過ぎない。たゞ四國の讃岐は「○○」型式によつてその特殊性を示さうとしてゐる。四國西南部の「○○」の分布は、かねて明白な北西色として、言ふまでもなからう。「蹴る」の例は一種特別である。即ち北西の「ケル」に對して南東では「ケル」が大部分を占め、「ケル」は尠く、宛も本項の前諸例の南東に於ける、「○○」の最多數「○○」の稀少と言ふ現象に逆行してゐる。

この項に於ける南東の「○○」型式は、「○○」型式と共存關係にあるが故に、先に「○○」と共存した「○○」とは、等しく全高型式ではあつても、その生成の過程を異にするかと思ふ。一體「ケル」の如く尾高型式をとること

は、東京語下降型の語例に徴するに、南東地方に於いては弱からざる基質的な一傾向らしく見える。随つて今「○○」は、「○○」の「○」が勢力を失つて低音化することにより生じたものとは考へ難い。「○○」型式の内部に、これが崩壊せんとする因子は包藏されてゐないとすれば、此處に外因を求めねばならないが、一つには當地方が別の語群に「○○」型式を有することの類推によるものではないか。次には、もとく北西の「○○」に對立する「○○」をその地方的基質の指向によつて顯示せんとしつつも、「○○」型式の語の發音體驗に煩はされ、遂に「○○」と「○○」との兩者の間に相殺を起し、爲に中間型式として「○○」の發生を見たのではないかと思ふ。或はかうも考へられよう。何れにしても、これが第二次發生的の型式性を有することは想察し得る所である。このことは又分布の上からも慥められるであらう。特例「蹴る」の圖に就いて見れば、「ケル」は、南東に於ける分布系統上比較的古い層に屬するかと思はれる四國西南部・近畿南隅を始め、その他四國北半・近畿の北部東北部の周邊等に存し、その上、南東と通することが多く古いものを示すらしい隠岐に多く存するのであつて、これらこそ北西の「○○」型式に對してはよく南東のこの場合の基本的特質たるべきものを示してゐると考へられるから、南東の「○○」はかゝる根元の型式の上に派生されたものと見られるのである。又、「蹴る」以外の三例で、「○○」は西播・丹後・奥丹波等の北西・南東兩系アクセントの接衝地方或は問題になる讃岐その他に極く僅かに現はれて居るのみであり、「書く」の例では全然見えてゐないで、何れも「○○」が旺であることは、よくそのことを證してゐると思ふ。

擬て「○○」型式が、獨り「蹴る」の圖に於いてかくも廣く南東を領してゐるのは何故であらうか。これに關して

は次項の上昇型の語例に於いて南東の主調が「○○」であることを想起しなければならない。即ち、彼此對比すれば、尠くとも南東地方としては、「蹴る」の語質の内に、次項の「卷く」などに於けると同じ屬性が含まれてゐる、と解することが出来るのである。さうして、南東としては「蹴る」の「○○」は下中型諸語例のと同じ視してもよいと言ふことになれば、「蹴る」以外の「○○」の語例に於いて現はれた南東の「○○」は、極めて稀存の現象であつて、殆んど「○○」に近い偶成型式とも見得るから、大した問題にはならない。一般に問題とされるのは、次の下中型の語例に於ける「○○」であつたのである。

第二項東京語の「下中」の語例四者に於いては、「卷く」「跳ぶ」「着る」の三者は互に酷似した型式分布を示し、之に對して「死ぬ」は語態にシス・シスルの兩者のある所からも、稍複雑さを増した分布を示して居るが、結局四例を一團と観ることに困難を感じない。今名詞の場合と比較しつゝ概括すれば、先づこの一團に於いては、名詞下上型の「型」以下の三例に見えた様な鮮明な對比的分布がない。さうして名詞の、東京語としては「下中」と目される語例、「柿」以下の三例に見えたのと同傾向をとるのが本項の四例なのである。型式上より言へば「○○↑↓○○」の逆對比を以て二大對立分布を爲すのではなく、北西○○↑↓○○南東を以て主調とするものを得たのである。扱てこれらの圖の特徴として最も大なるものの一つは南東地方に於ける「○○」型式の出示である。四國にあつては、伊豫土佐に跨がる例の西南部區はもとより、伊豫は中・北にかけてこれが存し、土佐は幡多郡に次いで吾川郡又は高岡郡にも之を存してゐる。これらによつては四國西半の、特に又伊豫の、九州中國地方に關聯する特殊性を窺ふことが

出来るであらう。近畿に於ける北方よりして東傍幅廣い地帯更に南部にかけての「○○」型式註一の現はれは、東方よりの影響として簡単に考へ去ることは出来ない様である。而もこれまでの分布圖を通觀すれば、近畿のかくの如き趨勢は、相當強いものであるらしいことが察知せられるのである。所謂十津川の特立傾向も、これらによれば別に怪しむに足らない、繋がりのわかる分布である。結局近畿にも、北・東・南に於いて、或は中國地方と或は中部地方と、同傾向をとらんとする基質の内存することが、認められるに至るであらう。註二

註一「死ぬ」の分布圖に於いて、「シヌル」は「シヌル」と一類であると看做すことが出来「○○○○」型式は又「○○」に準ずることが出来るから、本圖ではその取扱をした。

註二但馬丹後地方に於いてはこれが明かな事實であることが既にわかつてゐる。

次に主要な分布は、「○○」型式の分布が九州南北(今國の調査に於いて)、北陰及び隱岐、讃州地方に限られてゐることである。中にも問題として味はひを感じるものは、南東一般の「○○」の下にあつて獨り四國東北部が「○○」を以て特立してゐることである。若し北西・南東の對立分布と言ふ點よりするならば、この地こそ南東地方の要衝である。名詞下中型の場合に於いてはこゝにこの種のものの、この程度までの明瞭さは認められなかつた。讃岐地方の特異性は本項に至つて愈々確認せられる。中豫喜多郡にも亦「○○」を存する。こゝは名詞の場合にもかうであつた。總じてこゝは四國西南部區に包括せらるべきが如くであつて、又特殊性を帯びてゐるのである。南東に於ける敘上の特殊地域は、九州・北陰・隱岐のそれらと相牽引して、分布系統論に資する所が多いであらう。四國に對する上來の觀察よりすれ

ば、四國北半を南半以上に遙かに錯雑した分布の地帯と認定することは容易であると思ふ。而して今觀る限りでは、伊豫と讃岐との異質の程度は、嚴密に言つて、かなり大なるものとしなければならぬのである。これらのことは四國を、大にしては南北に分割させるべく、小にしては北半を更に東西に分たしめる所以である。而してこゝに残された四國の南半が、事實に於いてよく近畿一般の傾向との類同性を示し、而も南半内部に異質地域の分割が殆んどないと言ふことは、殊に注目を惹くものである。私は、近畿的アクセント分布の史的過程に於ける重要な一斷層を此處に發見したいと思ふ。

註 主として特多郡地方は謂ふ所の四國西南部に屬するものとして既に除外されてゐる。

轉じて北西の状態を眺めよう。之を名詞の下中型の語例の圖に比較するのに、彼にあつては隱岐は全然「○○」の一型式のみであるのに、此に於いては島前に「○○」を存する。又、九州に於いて「○○」の擴布することは、「鼻」「飴」等の圖に於けるよりも遙かに隆盛で、常に「柿」の圖に見られた程度の如くである。要するに北西地方に於いては、「○○」型式は名詞の場合ほどになく、反面「○○」を比較的多く存してゐるのである。此處に觀られる隱岐の複雑な状態は、北陰との關聯の下に相互の特異性を解明すべきであることを、自ら示してゐると言つてよいものである。特に後二例「着る」「死ぬ」に於いては、「○○」又はそれに準視すべき型式が北陰にも現はれてゐる。

以上を要するに、名詞下中型の語例に一般的な分布傾向と正に同律のものが動詞の調査語を通じて等しく認められる次第である。而してこの際認められた分布状態が、地方アクセントの本質或はその歴史性の解明上、前項の動詞

「〇〇」の語例に於けるよりも一層重要なものを示してゐることも、名詞の場合と同様、注意される。

「北西 〇〇 ↑ ↓ 〇〇 南東」の對立に於いて、北西の「〇〇」の語例は東京語の「下中」であるから、北西は東京語と同じく上昇傾向、南東は然らずと言ふことになる。若し北西と南東と正反對の型式對立をなす傾向に準じて考へるならば、南東地方は「〇〇」を存する筈である。然るに今「〇〇」は特殊分布をなすのみの程度であつて、一般は「〇」であることは、宛かも名詞下中型の語例の場合と同様であつた。「〇〇」型式は「〇〇」と併存するのが普通と觀られるのであり、「切る」「飲む」「蒔く」の例に於ける如く、極く僅かではあるが「〇〇」と併存するのは、特別に屬する。

「〇〇」が「〇〇」と「〇〇」との中間型式ではないかと言ふことを想像せしめる實際の分布は、九州北部に於いても亦見ることが出来る。「跳ぶ」「着る」「死ぬ」に於いて、豊前・豊後一般の「〇〇」と筑前・筑後一般の「〇〇」との間に「〇〇」が介在するのがそれである。二音節語の長音化傾向は、出雲・松江郡の「〇〇〇〇」型式化を除いては、他に全然見出されない。これは名詞の場合、南東地方に往々現はれたのとは異なる所である。日向南部には入聲のあらはれてゐる語があるが、その型式は何れも鑑別し得るものである。

x x x x

以上によつて、二音節動詞の場合全般にも亦、名詞の場合と夫々略々同様の状態が認められることを知り得たのである。而して、凡そ下中型の語例の方が、下降型のよりも一層複雑な分布を示すことは、尙、名詞の場合に恰當して

ゐるのであるが、此處に注意を要するのは、動詞の場合に於いて、降昇兩型の分布に於ける差異が、特に大であることである。即ち下降型の場合には、北西の九州に全然特殊現象を見せず、均しく「○○」であり、隱岐のみ特異性を示したのに、下中型にあつては、九州の南北に反對型式「○」が頻出し、廣大な特殊地域をなしてをり、同時に隱岐・北陸の状態は、これと關聯して變化してゐるのである。兩型によるかくの如き九州の急變化は、未だ例を見なかつた所である。隱岐の變化もそれに次ぐ。この間の事情が品詞の差異に基づくか否かは未だ明かでない。然し上昇型に屬する語例に於いては、名詞動詞以外の二音節語は勿論、更に三音節以上の語に至るに隨つて、益と特徴ある地方的變化が見出され、分布系統上の多くの暗示が與へられることは事實である。今後は、この方面からの調査を一層重視する必要がある。

下降型の場合は特に明瞭に對立分布をなし、下中型のものでは、南東地方に北西と同じ「○」型を多く見ること、名詞の場合にも増して強い傾向である。この、南東にも多く「○○」を見ることと、「北西○○↑↓○○」南東の鮮明な對立とを併せ考へるのに、後者の明確な對立に於ける南東の因子、即ち一般的に言つて南東の「○○」たらしめんとする指向力は、地方によつて質的な相違が含まれてゐるかも知れないけれども、兎も角かなり強いものがあると思はれよう。

二ノ三 二音節代名詞のアクセント

前にも述べた如く、二音節語の分布圖は、私の全分布圖中に於いて、一般的乃至基本的分布を示すものとして、重要視されるべきものである。これを以てすれば、地方アクセントの中心の問題にまで到達し得る所が尠くない。随つてこれは各種各方面の語例に就いて検討を盡すべきであることは、言を俟たない。然し今はその一斑の例を擧げ得るのに過ぎない次第である。

調査語 東京語の「○○」の語例……………誰—何處

右の二例に類するもの即ち一般に疑問の意味をあらはす語が擡頭的型式をとることは、東京語の通則となつてゐる。扱つてこれまでの例に従へば、北西の地方には東京語と同じ「○○」型式が全般に見えてもよい筈であるが、事實は全く相反する。即ち二例の分布の傾向は、却つて東京語の下中型の語例に於ける特質に合致してゐるのである。これは二には疑問代名詞の性質に基づくことでもあらうが、一つには又前述の上昇傾向、尻上り調子をとらんとする性質に因由するものではあるまいか。

即ち北西地方と東京語とは、必ずしも同質ではないと言へる。先には「雲」の例があつた。

或は寧ろ東京語に於いて「ダレ」「ドコ」の如きアクセントであることが、特別な事情による現象であるのかも知れない。

私はこれらを江戸語(假稱)に對する上方語(假稱)の影響によつて生じたものと考へてみる。今でこそ上方語では「ダレ」「ドコ」

であるが、「誰」「何處」の二例に僅か乍ら存する「〇〇」の分布を綜合して考へるのに、それが隠岐島後西半、西伯海岸の一部、筑後の一部、日向、伊豫南部の諸所に存してゐることは、分布上本型式が比較的古い型式であることを推論せしめるものであるから、結局「誰」「何處」に於いては「〇〇」型式が早くからあつたものではあるまいか。さうしてかゝる發音の傾向が江戸語へも影響したのかも知れない。尠くとも、疑問詞であるため、その意味的指向により、擧頭アクセントをもつに至るのだと説いてしまふことは、關西のかゝる「〇〇」の分布のある以上、早計に失するであらう。即ち先づ一應は史的過程をもつものとして注意すべきものゝやうである。右の場合は兎も角としても、一般に東京語のアクセントの中から、その本來性に倣さないらしいアクセントを鑑別すること、及び之に對して西方アクセントとの何等かの交渉も豫想しつゝその成立の過程を明かにすることは必要であらう。

「〇〇」型式の分布は大であり、例によつて近畿の外廓部にはこれが著しいが、更に、四國の西南部より伊豫を経て讃岐に互り遍在するに至つたことは、本項の初見である。中國及び九州との關係にもよるであらう。それだけ四國北半が南半とは性質を異にするとも言へる。同時に四國北半は、一方に於いて伊豫・讃岐共に各々の立場から別個の對外交渉をするわけでもあるから、各々獨自の特異性をも具有することになつたのである。

殘された四國南半は、近畿の内廓と共に「〇〇」型式の分布を示してゐるのであるが、前々からの、これと略々同方式の分布例を併せ觀るのに、豫て混雜した狀態の少い四國南半こそ、近畿との親近性が、北半以上に大であることを、こゝに指定してよいかと思ふ。乃ち、南東性とも言ふべきものの最内限度の據點としては、近畿の瀬戸内側内廓部及び淡路島を介して之に連る阿波土佐を擧げてよい様である。然し又「〇〇」型式の現はれる場合を廣く眺める時、四國北半にも亦之を見出すことが出来るのであるから、必ずしも右の様にばかりは言ひ難い。殊に讃岐には、他

の三國擧つて（特殊地域を除く）「○○」である際に於いてすら、尙且、「○○」を示して北西と逆對比を爲すこともあるのであるから、北半に於ける南東的性質は輕視すべきでない。それは別とするも、四國全體が必ずしも單純に近畿と色調を同じうするものでないことは、最初よりこの邊までの語例の分布圖を通觀することによつて、相當明確に把捉出來るのである。

四國西南部の特殊地域も、今の例及び同性質の幾つかの先例によつて、尠くとも伊豫に關する限りは、常には特殊地域であり得ないことも明瞭となつたのである。土佐では常に明白な特殊地域となつてかなり不動の限界を存してゐることは別に考へなくてはならないとして、伊豫にこれの變動があると言ふことは、所謂特殊地域の解明上、何等かの手掛りを與へられたことになる。大和十津川に就いて全く不思議とされてゐる特立も、實は近畿東・南傍のある種の分布傾向に基づく末端であることは、次第に明瞭となりつゝあるが、四國西南部に就いても亦、同様だつたのである。特殊な現象の見え勝ちの地域であるからとて、端的な表示のみを捉へ、直ちに四周とは隔絶したものであるかの様に解釋することの不當は、此處に明示せられてゐる。

扱て「誰」「何處」に加へるに「何」を以てし、且つそれらが一要素となつて構成された複合語、及びそれらの各を多少とも包含する話言葉の調子等に就いて、アクセントを検討するならば、開拓する所は更に大なるものがあらう。

二ノ四 二音節副詞のアクセント

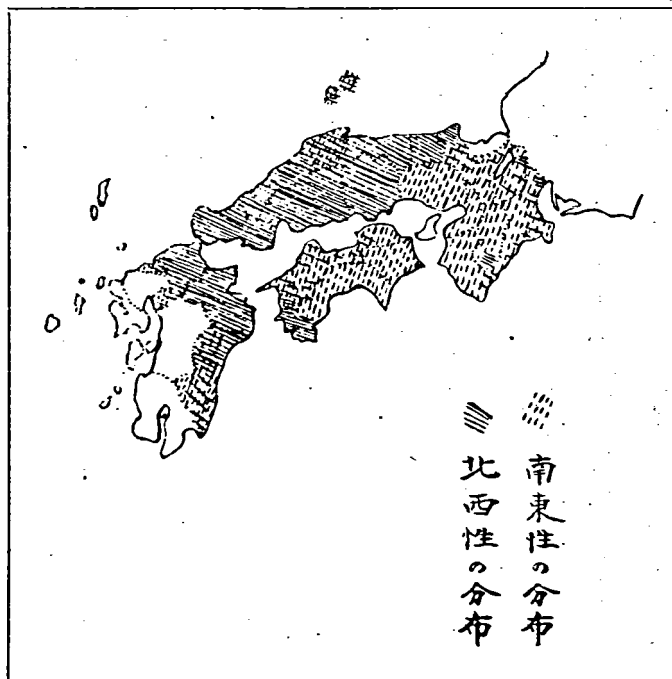
調査語 東京語の「○○」の語例……………未だ

此の語例に就いて、北西と南東とが、下降↑↓上昇の對比を示して、鮮明な二大分布をなしてゐることは、宛かも下降型二音節名詞に等しい。

三 二大對立の分布と型式

以上二音節語に於いて、名詞・動詞と言ひ、或は代名詞・副詞と言ひ、品詞を異にするものにあつても、その分布様式には、かくの如き共通性が存するのであつて、それだけ此處に、當調査地方のアクセント分布の實相として、根本的な傾向と目されるものが示されてゐると言つてよいと思ふ。扱て先の單音節語の場合は、單音節名詞に助詞の加はつたまでを假りに採つて眺めるとすれば、之を二音節名詞の場合に歸せしめて一括して考へることが出来るので、今は二音節語の問題に包攝する。此處に於いて左に、上來の全記述に基づき、之を要約して總覽圖を掲げてみよう。

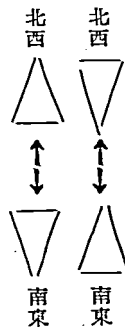
扱て各語例を通じて一定の分割が明瞭に捉へられるかと言ふと、さうではない。土佐西部に於ける、又播磨の西・北境に於けるが如き場合は、その分境が比較的よく固定してゐるが、その他の地方にあつては、圖に兩種斜線を交錯せしめても示した如く、兩種傾向の混淆があつて、一概にその地特有の性質を決定し難く、隨つて各圖に普遍的な分割



を見出すことは困難なのである。一々の圖に就いて觀れば、その兩種傾向の何等かの分割は、全部の地方に互つて爲し得るのであるが、各圖を通して觀る時は、圖面毎に若干の状態は動いてゐるのである。詳密な調査を加へれば加へるほど、一層各語例毎に、動的過程的な姿が反映されてくる。かくて、根本的な二大對立分布の色調そのものには變革はないのであるが、彼此の地方に於いて兩種傾向の出入及び參差錯綜が見られるのである。而してこれは全く結果から見ての説明に過ぎないのであつて、成立史的には、單に二種の傾向が重なり合つて成つたのみ單純に言つて済まされぬものであら

う。何れにしても根本的なものとして二大對立のあることは事實であり、隨つて、その、右圖に見る如き領野關係及び交合の狀態(交合の實態を以て示した所)は、必ずや、これが成立過程の一斑を、横の相に於いて物語るものでなくてはならないと思ふ。

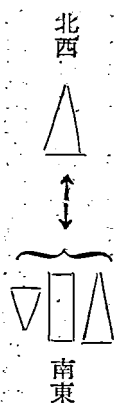
分布の色調としては飽くまで兩大分布として對立するものであつたが、次には之を型式上から立入つて眺めれば、分布對立の内質は決して單純でないことは總説の如くである。この内、最初に顯著なものとして注意せられるのは、東京語「〇〇」型の語例と同「〇〇」(下上)型の語例とに於ける分布相である。こゝでは



註 ▽ ▽ 下降型

△ △ 上昇型

の如き圖式を以て代表せしめ得る全然逆對立の型式關係が明白に認められた。二大對立分布はこれらによつて最も強く徴證せられてゐるのであるが、我々はかゝる相互に近接・接續した地域にかほどまでの乖離的な對應の見えることを以て、かなり大きな根本的事實の反照と見ざるを得ない。然し此の際に於いて、北西・南東各々の内に、自己の地方色とは相反した、對立する地方色と相應する、特殊分布の地區を見出したことも亦事實である。こゝに、北西・南東は乖離的な對應をなすものではあるが、それにしても尙何等か、對立に至るまでに、或る關係があつたのではないかと言ふ謎が、かなり強く語られてゐるかと思ふ。果して東京語下中型の語例に於ける分布相に於いては、



の如く、型式上の對應は複雑化してゐて、北西・南東兩者間に、かなり密接な繋がりのあることが示されてゐるのである。その内、特に△型のものが南東にもあることが、注意せられる。さうして分布から言つても、注意すべき分布をなすものであつた。こゝに我々は、一面乖離的な型式對立を見ると同時に、他面聯關的な相互交渉をも認めることが出来るのである。一箇の二大對立分布圖には、分布様式一般としては不變であるが、その對立分布の色調を割つて見るとき、實はかゝる二重性格の混在することが認められた。この對立に於ける乖離相と聯關相との背反的事實こそは、當地方アクセント分布の系統論乃至成立史的考察に對して關鍵となるものであらう。

もとよりこの複雑した事實が、すべて悠久の發生史的意義を有するものとは限らないであらう。操作の難易は別として、歴史性の薄い事實、或は専ら近代の交渉乃至中央語よりの劃一的影響によつて成つた分布は、一先づ之を措いて考へる必要があらう。然しその際と雖も、右の、對立に於ける聯關相を單に近代的の產物としてのみは片附け得まいと思ふのである。乖離相に於いて北西色が顯著な特殊分布として南東の四國西南部・十津川等に分布し、聯關相に於いて北西の△が四國であれば西南部から北半一帯にかけて、近畿ではその北方・東傍・南部(十津川を含む)に現はれると言ふ一事を以てしても、そのことは證せられると思ふ。かくして我々は、敘上の乖離・聯關の二面性を、二大對

立分布の一般相及び特殊相との關聯の下に、一定の歴史的意義を有するものとして受取ることが出来るのである。

四 現代國語アクセントの共時面

前條に述べた二大對立分布は、國語アクセント全般の立場から眺めれば、如何なる地位に立つものであらうか。由來國語アクセントの、現在見得る大きな事實としては、東西兩方言アクセントの二大對立が認められてゐる。こゝに取投つた南東地方(四國・近畿)は即ちその西方アクセントの明瞭な本領であつた。さうして所謂北西地方(中國・九州)のアクセントは東方アクセントと同系であつたのである。このことは諸家によつて早くから言はれて來たことなのであるが、事實は必ずしも悉くの點に於いて北西地方が東方即ち關東アクセントと一致するものを有するほどではない。既述する所によつても、その一、二は觸れられたのである。今この事を稍と明かにするために、國語アクセント辭典によつて一つの統計を示さう。

二音節名詞に於いて、東京語では下中型が數へられてゐるが、これが當地方では問題となるものであるため、これと東京語の下上型の語例の場合との差別相を觀察する一つの方法として、助詞「が」を添加してみた。所が當地方では東京語の「○○」型をも上昇型に發音する場合があるので、助詞「が」は、共に「○○」の語例にも一律に加へて見なければならなかつたのである。かくして右辭典の二音節名詞全部を、北西地方アクセントに屬する私郷里・大三島が、助詞「が」を加へつゝ、時にはこれに準ずる方法をとつて、一通り發音して見た。

關西諸方言のアクセント（下）

全然使用したことのなかつた語、又は用ゐなければならないもの、及び「が」を加へることの不適當なものも、その場で、他に準じて適當に處理した。

之を五十音順にも分別して示すことは割愛して、一先づその結末を示せば、概略次の如くである。

一、東京語の「○○」のもの……八一八例が、

北西地方アクセントでは、

○○ガ（例 雨、肩、箸） 七〇一例

○○ガ（例 王、雷、證） 六例

○○ガ（例 板、糸、斧） 三二例

○○ガ（例 席、卓、鋸） 一九例

○○ガ（例 渦、鴉、鞭） 六一例

二、東京語の「○○」（下上）のもの……二八二例が、

北西地方アクセントでは、

○○ガ（例 型、花、橋） 二二二例

○○ガ（例 庭、舌、葱） 一五例

○○ガ（例 床、仙、九々） 五例

○○ガ（例 一、牡、棒） 四一例

三、東京語の下中型のもの……三三三例が、

北西地方アクセントでは、

| | | |
|------|-----------|------|
| ○○ガ | (例 梅、風、旗) | 一一三例 |
| ○○ガ | (例 灸、情、棒) | 一八例 |
| ○○ガ | (例 牛、柿、口) | 一三四例 |
| ○Clガ | (例 内、沖、莖) | 三八例 |
| ○lガ | (例 煙、旗、莖) | 五〇例 |

註 一符は高音になる箇所を示し、一符はその音高度の稍も低いことを示す。高音符である點では兩者等しい。

以上を一瞥すれば、北西地方と東京語とが、何等かの差異を有することは先づ看取出來よう。この内第一番に、三の東京語の下中型のものに就いて観るのに、「○○ガ」型式をとるものが、最も東京語の下中型式に近似してゐると言へる。「○○ガ」は特殊な音成態を持つた語なので他と同時に論じ難い點があるが、大凡「○○ガ」に準じ得る。

問題は「○○ガ」型式のものにあるのであるが、「○○ガ」型式をとる二音節語と同一視し難いことは兩型式の比較から明かであらう。これを反復實驗してみるのに恐らくは「○○ガ」となるものの○○の方が、「○○ガ」となるものの方の○○よりも二音節間本來の上昇差度が一層大であると思はれるのである。即ち「○○ガ」と、最後の助詞を特立させる力のある○○は、大方下上型にも準視せられるべきアクセントを有するものと認定せられる。これを完全

な下上型と観て了へないのは、その二音節間の上昇差度が、當地方で「○○ガ」と發音せられる二音節間本來の上昇差度に少しく及ばない様だからである。尤も「○○ガ」の種類のもが稀例をなすのに過ぎなければ問題は自ら別であるが、實は右表の二、に示すが如く、東京の下上型の語例の主部分は當地方でも「○○ガ」となり、且つここに、上中下三段觀による東京語の「下上」關係に、毫も劣らぬ上昇の音高差度が認められるから、當地方としても、この方を下上型の正位に即かしめなければならぬのである。兎も角「○○ガ」となる二音節語はさう言ふものであつたが、右の三、の内では、更に明かに「○○ガ」の形をとる完全な上昇型のもの、及び却つて逆の「○○ガ」型式をとる下降型のものも相當數へられたのである。さうしてこの二類に至つては、北西地方が全く東京語と異る所として現はれてゐると言つてよい。

「當地方で「○○ガ」の形をとる二音節語のアクセントは、言ふまでもなく「○○」である。その場合、「○○ガ」などとなるものは當方にはないから、そこに何の混亂も起ることはない。

それらの明白な事例を暫く他所にして、「○○ガ」「○○ガ」を觀ても、「○○ガ」の方が比較的優勢であることは、注目に値する。假令この種の二音節語が依然「下中」的なアクセントであつたとしても、「ガ」の承接によつて起るアクセント成態の相違は、必ずや「○○ガ」の○○のアクセントの本質が、「○○ガ」の○○のアクセントのとは何等か相違することを考へしめるであらう。かゝる異つたものが、東京語並みの「下中」例と對等に多數あることは、輕視出來ないのである。加ふるに右表の一、二に於いても「○○ガ」型式は現はれてゐる。かくて我々は「○○ガ」

型式の點からも、當地方が東京語とは何等か異なることを窺うのであり、而もそれが、「○○ガ」や「○○ガ」の如き、東京語とは大差ある、又は背反的な事實でなく、下中型式ともかなり關係のある點に、特殊の興味をも感ずるのである。

こゝで又三段觀二段觀のことに觸れておきたい。右の「○○ガ」「○○ガ」「○○ガ」等の關係よりすれば、當地方も亦東京語と同じく三段觀をとるのが、一層精確な態度と言へよう。二音節語に關する限りはさうなのであり、又既述の如くんば、單音節語についても亦、何等か三段觀を必要とするのである。然し「○○ガ」となるものの○○のアクセントが、單純な下中型と關係があり乍ら兩も下上型に近いと言ふので、未だその特質を徹底的に決めかねるから、暫くは低高の二段觀によるのを穩當とするのである。又假令三段觀が必須と言ふ様な結果になるものであるとしても、方言アクセント調査の道から言へば、寧ろ高低觀から入る方が一層適切有效の様である。

右表の二、東京語の「○○(下上)」の語例に於ては、單純な下上型とはアクセント質の違つた「○○ガ」及び「○○ガ」が見え、更に「○○ガ」が前二者以上に多くあり、これらが寄つて、當地方の、東京語と相違する所を現はしてゐる。右表の一、東京語の「○○」の語例に於ては、「○○ガ」及びそれに準じられる特例「○○ガ」、次に「○○ガ」、「○○ガ」があつて、何れも上昇傾向のアクセントに屬し、この點、東京語に背反する状態を以て、大きな當地方の相違を示してゐる。而もこの際最も顯著な上昇アクセントの「○○ガ」の例がそれらの中に最多であることは、看過出来ないのである。

三、の一つの項内の異型式が、夫々他の項内に現はれるのにも觀られよう。ともあれ三項何れの場合にも種々の異型式を幾つかづゝ數へ得ると言ふことを、全體的に一考する時は、當地方アクセントが東京語のと全同ではなく、何等か基質的な相違も藏する點があることを想像し得ると思ふ。

註 而も前掲の統計では、東京の一語に二種のアクセントのある際には、當地方と共通し又は近似するものゝ方をとつて、其處は寧ろ努めて共通點を拾つた次第なのである。

兼ねて右表の統計に省いた二音節の地名・姓名を見ると、

一、東京語の「○○」のもの……四三例が、

北西地方アクセントでは、

| | |
|-----------------------|-----|
| ○ <u>い</u> ガ(例 井伊、隠岐) | 三六例 |
| ○ <u>う</u> ガ(例 岡) | 一例 |
| ○ <u>え</u> ガ(例 門司) | 一例 |
| ○ <u>お</u> ガ(例 伊勢、土佐) | 五例 |

二、東京語の下中型のもの……八例が、

北西地方アクセントでは、

| | |
|-----------------------|----|
| ○ <u>あ</u> ガ(例 阿部、水戸) | 五例 |
| ○ <u>い</u> ガ(例 辻、木曾) | 三例 |

の如くであつて、此處にも亦右述の想察を授けるものがあるのである。

先に西方アクセントの明瞭な本領と稱した近畿、四國に就いても、更に細密な一考を要する。即ちこれら兩地方は、一概に全然同質のアクセントを有してゐるものと觀てよいかどうか、先づ疑はれるのである。四國のアクセント分布が、内質的に近畿地方よりも一層複雑であることは先に屢々述べた。さうして、かゝる事態の内にあつて、二音節動詞「卷く」「跳ぶ」「着る」「死ぬ」のアクセント分布の

北西 ○○↑↓○○ 南東

なる一般的特徴の下に於いて、南東中の四國には、讃岐の大部分及び之に接する伊豫東端の一郡、更に四國西南部區に接する而も孤立的な特徴を呈することのある伊豫喜多郡の各々に「○○」型式があつて、深い根柢を持つた一般的事實と目せられる「北西↑↓南東」の背反的對立關係を、この場合四國の内に於いてこそ一層よく示し得てゐる(○○↑↓○○)一事は、四國の内部に近畿とは違つた點の現に存することを認め得る一證にはならないだらうか。この四國內の「○○」型式は、同一圖例内で、九州に於いても日向と筑前・筑後の各々の中に多く見出され、又隱岐の島前の三島にも見出された。北西に於けるこの特殊分布と四國の該分布とを考へ併せる時、南東殊に近畿一般が「○○」であるのに對しては、「○○」の分布こそ、一段と古態に屬するものを示すのかも知れない。私見によれば、四國近畿共に近畿アクセント性とも言ふべきものによつてたつのであるが、何れかと言ふのに、四國の方が、近畿以上に古いアクセント性を有するのかと觀てゐる。かゝる問題には今立入らないとしても、兎も角、近畿と四國とが、如何なる語例のアクセセン

分布に於いても、常に同時に一括して論ぜられてよいものではないことは、型式種別とその分布相との關係から、認められるのである。然し乍ら、近畿と四國との開きは、北西地方と關東などとの隔りには、比すべくもないであらう。

北西地方が多かれ少なかれ關東などゝ異ると言ふ中にも、最も特徴的な事實は何であらうか。問題の二核心は東京の下中型の語例にあると思ふ。これらが「○○ガ」「○○ガ」となる特別のものを除けば、他は「○○ガ」「○○ガ」を含める」と「○○ガ」とに略と接半され、言はば「○○ガ」がかなり優勢であることは、下中型語例の中にも當方では「下上」らしく聞えるものが多いと言ふことであつて、それだけ當地方の方が東京語よりも上昇傾向が顯著であると言へることになるのである。「下上」に近いものが「ガ」を加へると「○○ガ」の形をとることは、當地方の言葉調子の性向を端的に示してゐると言つてよい。即ち當方としては、言葉調子は尻上り調が著しいのである。一方、三音節以上の多音節語に於いては、明らかな擡頭式アクセント(例、「○○○」)を示す實例が比較的(或は甚だとも言へようか)尠い様である。彼此を合せ考へる時は、先の表に於いて

一、東京語の「○○」(下上)のもの……二八二例が、

北西地方では、

「上昇型(「○○ガ」「○○ガ」「○○ガ」)……二四二例
「下降型(「○○ガ」)……四二例

三、東京語の下中型のもの……三五三例が、
北西地方では、

上昇型〔○○ガ〕〔○○ガ〕〔○○ガ〕〔○○ガ〕……三〇三例
下降型〔○○ガ〕
……五〇例

となるものの、下降型の混在もさることながら、

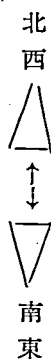
一、東京語の「○○」のもの……八一八例が、
北西地方では、

下降型〔○○ガ〕
……七〇一例
上昇型〔○○ガ〕〔○○ガ〕〔○○ガ〕〔○○ガ〕……一七例

となるものの、上昇型の混在の方を、一層大きい質的事實と見ることが出来るのである。偶々上昇型一一七例中でも
「○○」の明らかな下上型が就中多いのは、注意せられる。今、分布に就いて見ても、彼の出雲地方は、隠岐などと
共に南東的なものを藏する所とも觀られるのであるが、そこが中國一般に「○○」である時は「○○」を呈して（註
東京語アクセントと北西地方のとの對照表及び之に直接關聯しての記述の外は、アクセント符號としての「ー」の使ひ分けはしない。即
ち本稿の最初以來の高低觀の施符法に隨ふのである）特殊地域を構成し、中國一般に「○○」である時は、之に同じて何等差
異色を示さないこと（一音節語の場合にも、これと同じ様なことがある。）等よりすれば、所謂上昇傾向の強い所とも見做す

ことが出来、それだけ出雲などを、中國地方に於いて全然異質の地であるかに観ることの無理を感じるのである。換言すれば山陰地方に反中國的なものが見えるからと言つて、そのすべてが別個の成立に係るものとは遽かには見窮め難く、寧ろ中國の全般を覆ふ傾向そのものに根ざす時代的方處的變異もあるかとも見ておく方が、今は尙穩當なのである。絃上の如くにして我々は、北西地方に上昇傾向の一基質を認めることが出来るかと思ふ。宛かも我々の語感を以てすれば、東京語には下降傾向の語が多いと思はれるのも、決して偶然ではなからう。

上昇傾向にかなりの強さを持つ北西地方に對して、分布様式上では明かに之と對立の地位にある南東地方は、如何であらうか。型式的にはこの間に乖離・聯關の二相が存したことは、既述の如くである。その聯關相に就いて考へる時は、北西の上昇型に應ずる南東の上昇型式の分布が、歴史的な成立過程を示さぬ様なものではないと言ふことから、之を輕視し難い。同時に又、この場合に稀存する▽型式の分布も多分に歴史性を示唆するものとして受けとられた。これと、乖離相の一つの



の關係に於ける南東の嚴然たる▽とは、基質的に通じないものではないだらう。すると南東では、下降傾向を一つの強い基質として認めたくなる。偶々一四國人の、近畿的アクセントが東京語アクセントに改訂されて行く過程を調査したのに、どうも三音節の「○○○」型式のものが、就中後まで、改訂成績の擧らぬものとして残されたのである。

例、ツヅリ (殺)

ス|マン (すまない)

エ|ライ (えらい)
シ|モク (しまった)

又南東地方の言葉調子を觀察する時は、四國人などは頭高調をとることがかなり多く、或は中高調をとることも多い。中高調は、之を語アクセントの「○○○」型式(その他「○○○○」以下種々ある)に比肩せしめることが出来ると思ふが「○○○」型式は、證明は省くとして、私の調べによれば下降傾向のものとすべきなのである。之に準ずれば中高の變曲を成す言葉調子も、一種の下降調即ち頭高調と見做すことが出来る。以上彼此を併せ考へれば、今一つの乖離に於ける



もあつて先に輕視出来ないとした上昇型式の特質を強めものであるが、結局下降傾向の方を、一大基質として認定しなければならぬであらう。一般に「○○○」の如き全高型式が南東にだけあつて、南東の最も顯著な特徴型式をなし、而もそれが、北西一般の「○○○」に對して、少數の「○○○」型式と併存しつゝ南東の一般色を成してゐるのによつても、何れかと言へば下降型式をとらんとする基本的動向を觀察すべきであらうか。(既述の全高型式に關する條参照)

註 北西に於いて先の統計では、東京語の下中型の語例中のキユー(急・灸)・キョー(經・興)・クー(空)・ジョー(情・錠)・ダイ(代)・チユー(註)・ハイ(蠅・灰)・ヒョー(表・評)・ホー(法・報)・ポー(棒・ヨイ)・宵・レエ(謝禮)、
「○○」型の語例中のオー(王)・チョー(帳)・ヒョー(電・豹)・ライ(雷)・レエ(敬禮)が、「○○○」となるものであつた。然しこの内に見出される二音節語の全高型式は、

關西諸方言のアクセント(下)

南東の右の全高型式とは似て非なるものである。そのことはこれらの諸例がすべて長母音による二音節語、又は [ai] [oi] 連母音を持つた二音節語であることから、容易に注意せられよう。(ai) [oi] の [i] は狭母音であるため、廣い [a] [o] に對しては極めて從屬的で、隨つて [xa] 又は [xo] 音節に對しては [i] は獨自の音節としての個性を保有し難く、その爲、ダイ・ヨイなどはジョーなどの長母音のものと殆んど同じ傾向の語音質を有すると見られる。即ちこれらは左様な語音の爲に「○○ガ」となつたのであつて、實は「○○ガ」に準ぜられるアクセント質を有するものであつた。事實、時にはさうも發音せられることがある。もとより南東地方にあつても、右の諸例は同じく全高型式に發音されるやうであるが、然し南東の全高型式は、決してかゝる特殊の語音質を有するものに限らない。これらにも現はれると言ふだけのことであつて、その現れ方は廣く、且つ語音上では大凡自由なのである。かくて北西の「○○ガ」は既述の如く全く特殊の異例とすることが出來、常に「○○ガ」に包括して考へてよいのである。

以上によつて北西と南東との特質は捉へられたであらう。乖離相に於ける北西・南東の兩者は、何れも \bigwedge と \bigvee とを明瞭に示し得たから、一概に北西は上昇傾向、南東は下降傾向が強いとのみは決め難い。然しこゝに、要は乖離するほどの關係にあるのだと言ふことを考へ、一方その各々の特質は何かと求めて行つた時、北西・南東に、假りに上昇・下降の傾向が捉へられれば、これらを以て、乖離相の背反關係を成立せしめる地方的基質のより著しい反映と見ることは許されよう。

本調査地方即ち北西・南東のアクセントの、東京語と共に觀た三者相關の姿に於ける、分布と型式の法則性は、概略上述の如く規定される。これによつて、地方アクセントの何物たるかは、國語アクセント全般の問題として、あと

附けられた。この際、東京語との關係によつて直接問題を起すのは北西地方であつたが、結局これらを同系と見ることは許されてよい。かくして、こゝに、

北西：南東 〓 東方：西方（主として近畿四國即ち南東）

の對比關係が大體把握せられ、本調査地方のみをとつても、現代に於ける國語アクセントの全般に關する中樞の問題は、縮圖的に看取することが出來たのである。故にこれだけの範圍を調査の對象として選ぶことも亦、國語アクセント全般に對する一つの側面的研究の地盤に當つてゆくものとして、その必然的理由が認められよう。

五 後 語

敘上の如き現代の共時面は、やがて通時的に解釋せられることになる。こゝに亦我々は、右述の如き性質を孕む本調査地方は、國語アクセント史の逆視的研究に資する所が最も大であることを知り得るであらう。

この部面に關しては、別稿に譲り、多く述べることを避けるが、逆視の爲には、先づ東京語アクセントとは前述の様な關係に立つ中國アクセントを精査することが一つ必要である。會て金田一春彦氏は、その「現代諸方言の比較から觀た平安朝アクセント」（方言七ノ六）に於いて、廣島アクセントを東京アクセントよりも一時代前のものとせられたが、此は、見方或は論證の手順は悉く同じではないとしても、結果に於いて私の共鳴したい所なのである。さうして廣島アクセント即ち北西地方が、さうであるだけに、南東即ち西方アクセントとの問題的な交渉は、實際に東方對西

方の場合よりも一層複雑化してをり、随つて深みが示されてゐるのである。（この點からして本調査地方こそ、逆視的研究の爲には最も重要な地盤をなしてゐると言つてよい。）之を深く探求すれば、南東地方との一層深い關聯も窺はれてくるかも知れない。かう言ふ爲にも我々は、何が中國アクセントか、何が近畿アクセントか等の、現在に於けるアクセントの體系的特質を把握しておく必要があるのである。中國が東京と關聯しても、單に純粹な同一系統アクセントの新古關係とのみ言つて濟せない問題を内藏する時、我々は先づ、現在の東京語アクセントの體系的特質又はアクセント性は那邊に在るかを、豫め究明しておかなくてはならないのである。かゝる用意の下に北西地方の一般分布と特殊分布、及びそれらの型式關係は讀み解かれねばならない。さうすれば、北西地方とても、地方アクセント成立の頭初から南東地方とは袂を分ち、各々別の歴史を辿つて來たとのみも言はれないことが、出て來ようか。

次に南東地方に於いては、特に四國アクセントの精査に當ることが緊要であらう。（これに關する事情の一斑は前にも述べた。）さうして、この時も亦、北西に對して實は深い關係を有する點もあることが一層よく窺はれてくるかも知れない。かくして北西・南東の現在のアクセント分布の關係の一面である聯關相の深い根柢が、先づ明化されることであらう。即ちこゝに發生史的に見て北西・南東間に通ずる分子が捉へられるかも知れない。この故に尠くとも、所謂關西方言なる概稱と範圍とを、何等か實質的意義を有しとするかも知れないものとして一應立てておくことは、正當な用意と言はなければならない。

因みにアクセントの地理的分布は、他の語法などの分布とよく合致する傾向が強く、而も北西・南東には、一丸となつて對一的な

然し如何に關聯するものがあらうとも、而してそれが強い歴史性に富むものであらうとも、（北西・南東の關係の他）の一面である乖離相に到つては、一層根柢的な淵源の契機を持つものであるのかに感じられる。これの解明の爲、假りに乖離の兩端の地など究明の手の下し様すらも無い程の悠久の事實であるのかに感じられる。この解明の爲、假りに乖離の兩端の地位に在るものの中に、祖源的なアクセントを設定し、そこからの發生變遷史を説かうとしてみても、其處から今の兩端のものに各々分立してくる過程の型式的説明に、夫々の現在のアクセントのアクセント性とも言ふべきものから容易に納得し難いものがあつたら、その説明法は十分生かされてゐるとは言へないであらう。この意味に於いて服部四郎氏の「原始日本語の二音節名詞のアクセント」〔方言七ノ六〕にも、考綴の餘地が残されてゐるかと思ふ、例へば、東京・廣島等の方言での第一群の變化として「↓↑↘↗」：「↓↑↘↗」：「↓↑↘↗」を説かれるのであるが、當地方に「○○○」型式、「○○○」型式（第三音節は助詞）を推定することは、この型式を一般に有しない現下のアクセント體系からは、多少の困難を感じるのである。如何にもアクセントそのものには時代的變化があり得たであらう。然し、そのアクセントの體系的特質が時々に変化したとは俄かに考へ難いのである。惟ふに或は「○○○」「○○○」及びこれらに準ずる諸型式（例、「○○○○」「○○○○○」「○○○○○」……）は、この方面の考察に有力な關鍵となるものではなからうか。これらは、語例次第では、北西的のものとしても、又南東的なものとしても現はれて来る。何にしても乖離相の本質の究明の爲には、餘りにも顯著な對比を示し勝ちの二音節語の例の

追求にばかりには止まり難いのである。さうしてかゝる多音節に互つて來れば来るほど、その語アクセントが、果して上昇型のアクセントなりや又は下降型のアクセントとなりやの判定は、極めて大切なことになつて來るのである。これは甚だ困難な事であるが、然し我々はその證明に手を盡すべきなのである。「○○○」型式は先に「○○」型式に準ずるものとして述べておいたが、かゝることも丹念に實證せられねばならない。こゝではそれに觸れないが、たゞ型式性の決定の爲には、一語に就き一定の地域に於けるアクセント分布を調べ、それと、同地方に於ける二音節語例のアクセント分布とを比較して、二音節語の明白な上昇・下降に鑑みつゝ、分布相の全體觀の上から、その語を下降とも上昇とも決めることが、一つの操作として採られてよいことは、言へるのである。この意味に於いて所謂一型・二型を說かれる平山輝男氏のA型・B型の統括には、稍と手續きを省き過ぎた點があるのではあるまいか。兎にも角にも、二音節語に見える乖離相は、三音節以上の語によつて大いに斧鉞が加へられなければならない。而も、一方聯關相もあることであるから、東京語で言ふならば下上型の系統に屬するものを選んで、多くの場合を確かめ、之を歸納するのを、重要な一方法とすべきであらうと思ふのである。中國地方は、三音節以上では既に上昇型のものを、一層多く示して呉れてゐる。

末尾に一言蛇足を加へれば、北西と南東、或は東方・西方の兩種アクセントの深遠な對立も、原由に溯れば、或は北西乃至東方のアクセント體系の方が一層古いのではないかと私は解してゐる。これに關して服部氏は、早く國語科學講座の「アクセントと方言」に於いて、「兩方言のアクセントの中、……甲方言（高知方言）の方が古いとの説に傾

いてゐる。」と述べられ且つ、「本州方言内に於けるアクセントの分布状態は、むしろ乙方言（東京・十津川）のアクセントを古いと考へるに有利の様ではある。」と附言せられたのであるが、右掲の論文で結局

新説では、「乙種方言」のアクセント體系はどちらかと云へば「甲種方言」のそれ（近畿アクセント）より原始日本語のそれに近い（第三群の語に於けるアクセント頂點の位置）のだから、今日の如き分布状態を呈することも容易に説明出来る。

と訂正せられてゐるのは、賛意に堪へない。但し私の實證しようとする手順には、氏の型式變化の説明法とは違つた點もある。もとより純粹型式の問題としても見なければならぬが、又型式と分布との相關の下に於いて、多くの場合からの歸納的な探證も大いにせられねばならないであらう。此の意味に於て「○○○」「○○○○」型式なども重視せられるかと思ふのである。

北西・東方アクセント體系が一層古からうとも、南東地方のアクセント體系も、決して短かい歴史を有するものではない。一體アクセントの史的 연구には、方言アクセントの比較歸納による逆視と共に、文獻のアクセント史料による徵證が必要であるが、今、文獻史料に據れば、平安朝時代に溯つても、近畿方言アクセントの體系的特質は、京都地方にそのまゝ保たれてゐたことが知られるのである。更に古事記に見える若干の指聲例も亦、その研究史への反省と幾らかの實證とを以てすれば、同じく近畿アクセントの系統に屬するものと觀られるのである。かくて我々の歴史時代に於いて、一方、東方アクセントの系統が如何になつてゐたかは不明としても、近畿アクセントの體系的特質は、既に頭初から見えてゐたと考へられるやうになる。もとより時代と共にその中に變異を生じたこともあつただらう。

(金田一氏は、そのことに關して、先の論文に、類聚名義抄による精細な研究を示された。)然しその變異が從來の體系を動かすほどの異變であつたか、尠くともその體系内に於いて生じ得る程度の變化であつたかは、我々の深く注意したい所である。この點、近畿アクセント史では、そのアクセント性の變動する様なことはなかつたと見てよいやうである。

アクセント性はかほどまでも動き難いものであると言ふことが、若し東方アクセント體系にも適用せられるならば、これも亦、近畿アクセントと尠くとも同等程度には、悠久の歴史を孕むものであることが想定されよう。

然る時は、服部氏の所謂原始日本語のアクセントは、歴史時代の初頃及びそれ以前の問題であることになる。さうであるならば、アクセントの體系的特質の、強い不變性を念頭に置いて述べた先の評言は、最早や取捨てられねばならない。それは即ち、極めて往古に屬するアクセント先史には、如何なる大きな特殊事情があつたかも知れないこと、及び時代がどれほど長かつたか不明であることの二つは、一應豫想しておく必要があるからである。然したゞ、第一群とされた「 \downarrow 」なる二高節語全高型式を、原始日本語の最初から氏が認められるとしたら、それは問題なのではあるまいか。

我々は常に國語の現在から明日への問題を最も緊切な事項として考へる。國語アクセントの歴史が上述の如くであるとすれば、我々は、たゞ二大對立アクセントのあるがまゝを、全體的な歴史的事實として受取らなければならない。

かくて次には、これ以上由來の見極めをつけようとする努力に、勝るとも劣らぬ努力を拂つて、最早やこの史實から出發し、國語アクセントの教育を如何にして實施して行くべきかの緊要な問題を考究しなければならないのである。

こゝに又史的究明と同様な難題が横たはつてゐることは、背反性もある二種アクセント體系の實際から、凡そ明瞭であらう。これを、簡単に東京語アクセントを標準とすると言つて了へばそれまでであるが、實はそれを如何にして實現させるかと言ふ點に至ると、根本に戻つて兩種アクセントの質的相違を検討し、こゝに教育の工作案を學的に練らなければならないのである。その爲には、先づ一方のものにのみ執した偏見は捨て去らねばならない。更に國の周邊地方にあるアクセントもよく考へ加へるべきである。

國語アクセントと教育の問題も亦、研究價值に富んだ成層を有する本調査地方のアクセント共時面から、強く懲慚せられるところであつた。

以上を要するに、「後語」に於いては、一方が他を通してではあるが、現代國語アクセントの共時面から、問題の二面的發展を見たのである。さうして、アクセント教育の問題に對しては、右の記述の量こそ僅かであつたが、今では、アクセント史的な詮索に對してより以上に、關心の多大なるものを私は有することを、此處に附言しておきたい。

(昭和十三年三月十三日)